第４９回「城戸賞」応募作品

サレンダーミッション
～８月の白い鳩～

ヨシダケイ

あらすじ

昭和２０年８月１５日。日本は太平洋戦争に敗北。家族を空襲で失い、部下を特攻で死なせた鷲野省吾海軍大尉（３５）はすべてを失った喪失感から自決を考えていた。だが、かつての上官横山一郎海軍少将（４５）が鷲野に「マニラに降伏軍使を運ぶためのパイロットになって欲しい」と頼んでくる。実は戦争は終わってはおらず日本の危機は目前に迫っていたのだ。

降伏文書に調印をしていない日本に対し、ソ連軍は領土拡大のため千島列島から上陸し北海道を占領する勢いであった。さらにアメリカは、もし日本が攻撃をしかけようものなら徹底した報復と三度目の原爆投下も考えていたのである。

パイロットに頼まれた鷲野は「日本の危機のため」自決を止めかつての部下、木村、本庄、内田と合流し、沖縄の伊江島を目指すこととなる。

そんな中、小園安名司令の率いる厚木基地が反乱を起こしアメリカに対して宣戦を布告。さらに鷲野の部下の一人杉浦も「死んだ仲間のためにもアメリカと戦う」と考え、降伏を目指す鷲野達を殺そうと厚木基地の反乱に参加。

だがもし戦争再開となれば今度こそ日本は滅びてしまう。

一方、鷲野達は、横山や軍使の河辺中将や岡崎勝男と合流し、マッカーサーの命令により愛機を白く染めあげた「緑十字機」に乗り、マニラを目指すこととなる。

陸海軍の軋轢を抱えた横山と河辺の対立、「緑十字機」の故障による着陸の困難、伊江島で出会った日系アメリカ兵と日本人嫌いのアメリカ士官との交流。これらを経ていくうちに鷲野は生きる力を取り戻していく。

さらにマニラで河辺達も、杉浦達厚木航空隊がアメリカ機撃墜をしたことにより、戦争再開の危機を迎えるが、河辺の態度がマッカーサーの心を動かし戦争を回避。皆、戦争終結のため一致団結を始める。

帰路、「緑十字機」は燃料切れで墜落するが、これも鷲野の天才的な腕で不時着に成功。戦争継続を求めていた小園司令、杉浦の思いもついに鎮圧。

９月２日。戦艦ミズーリの上で降伏調印は成され、この任務を成し遂げた鷲野の中に「自決」の文字はなく新たな人生を踏み出そうと歩いていくのであった。

参考資料

わちさんぺい『空のよもやま物語　空の男のアラカルト』（光人社ＮＦ文庫・２００８年）

小林孝裕『海軍よもやま物語』（光人社ＮＦ文庫・２０１１年）

棟田博『陸軍よもやま物語』（光人社ＮＦ文庫・２０１１年）

岡部英一『緑十字機　決死の飛行』（静岡新聞社・２０１７年）

畠山清行『秘録　陸軍中野学校』（番町書房・１９７１年）

太平洋戦争研究会　『面白いほどよくわかる太平洋戦争』日本文芸社・２０００年）

太平洋戦争研究会『日本陸軍がよくわかる辞典』（ＰＨＰ文庫・２００２年）

太平洋戦争研究会『日本海軍がよくわかる辞典』（ＰＨＰ文庫２００２年）

登場人物表

緑十字機搭乗員・横須賀海軍基地隊員

鷲野省吾（３０）（３５）海軍大尉。横須賀海軍基地パイロット

杉浦慎一（２０）（２５）同・飛曹長。厚木の反乱に参加。

木村公貴（２０）（２５）同・飛曹長。緑十字機搭乗員

本庄玄斗（１８）（２３）同・上飛曹。緑十字機搭乗員

内田涼平（１８）（２３）同・上飛曹。緑十字機搭乗員

新坂真史（１８）（２３）同・特攻隊員

吉田誠（１８）（２２）同・特攻隊員

降伏軍使

横山一郎（４５）海軍少将。降伏軍使。和平推進派

河辺虎四郎（５５）陸軍中将。降伏軍使。陸軍参謀次長

岡崎勝男（４８）降伏軍使。外務省調査局長

厚木基地

小園安名（４３）厚木海軍基地司令

緑十字機搭乗員家族

鷲野佳代子（２３）（２８）鷲野の妻

鷲野林平（５）（８）鷲野の息子

本庄美知子（２０）本庄の妻

木更津基地女学生

日本政府

東久邇宮稔彦王（５８）内閣総理大臣

重光葵（５８）外務大臣

高松宮宜仁親王（４０）昭和天皇の弟

伊江島アメリカ兵

スティーブ（３４）アメリカ海軍士官

マサユキ・パットン・コモリタ（２５）日系アメリカ軍兵士

鮫島住民

安居右門（７５）

安居正雄（１７）。

安居恵（１７）
電話交換女性

アメリカ軍
ダグラスマッカーサー元帥（６５）連合国軍総司令官
マシューバー大佐（４５）
ウィロビー少将（４８）

この物語は史実を基にしたフィクションである。そしてこの物語を緑十字機搭乗員の方々、岡部英一先生、亡き祖父に捧げる。

○神社

T・昭和１５年　紅葉が広がる神社。
笑顔の鷲野省吾（３０）は軍服。和服の妻・佳代子(２３)と息子・林平(３)。
写真屋がカメラを構える。
写真屋「はーい。撮りますよ」
シャッター音。おじぎをする写真屋。

○出店が立ち並ぶ屋台

歩いている鷲野と佳代子と林平。
鷲野「七五三で写真を撮るようになるとは。時代も変わったな」
佳代子「よく撮れてるといいですね」
鷲野と佳代子は林平を見る。
鷲野「この前まで赤ん坊だと思っていたが」
佳代子「もう３つですから」
突然聞こえる声。
部下たちの声「鷲野少尉！」
鷲野の前に並ぶ杉浦慎一（２０）、木村公貴（２０）、本庄玄斗（１８）、内田涼平（１８）、新坂真史（１８）、吉田誠（１８）。ニヤニヤ笑う部下達。
内田「今日は記念撮影ですか？」
鷲野「う、うむ。まぁそんなところだ」
ひそひそ話す部下たち。
吉田「(小声) あの鬼の教官が。へえ」
鷲野の家族への優しさに驚く部下達。
木村「少尉。訓練では鬼。ご家族の前では仏。まるでアシュラですね」
鷲野「木村！　何を言う！」
顔を赤くする鷲野。笑う佳代子。
杉浦「少尉殿に失礼だぞ」
木村はおどけて敬礼。
鷲野「まあいい。お前たち。休暇とはいえ羽をのばしすぎないようにな」
ビシッと並んで敬礼した部下達は去っ

ていく。残された鷲野家族。
佳代子「愉快な方たちですね」
鷲野「そんなことはない。木村はすぐ怒るし、杉浦は早とちりはするし・・・」
佳代子「皆様。あなたを慕っているのがよくわかります」
キョトンとする鷲野。突如聞こえる万歳三唱の声。向こうでは人々が出征兵士を称える。「天に代わりて不義を討つ」と軍歌「日本陸軍」を歌う人々。暗い顔になる佳代子。
佳代子「戦争はまだ続くのですか？」
鷲野「中国戦線も芳しくない。アメリカとの交渉が上手くいけば良いのだが」
佳代子「世界の国が仲良くなればいいのに」
鷲野「理想はな。だが俺は軍人。命令があれば日本のため戦わねばならない」
林平「サイダー、サイダー」
林平を抱っこする鷲野。
鷲野「わかったわかった。あそこで買おう」

○真珠湾攻撃の映像

N・昭和１６年１２月８日。長きにわたった日米交渉もむなしく、真珠湾攻撃により、日本は米英蘭豪連合国と開戦の火ぶたを切った。当初、破竹の勢いで進撃を続けた日本軍であるが、昭和１７年６月、ミッドウェイ海戦に大敗。これ以降、日本は守勢となり、圧倒的な物量を誇る米軍になすすべもなく敗れていった。

○鷲野宅

T・昭和２０年３月８日
玄関。鷲野を見送る佳代子と林平。
佳代子「お帰りはいつに？」
鷲野「戦況が悪化している。何とも」
佳代子「どうかご無事で」
林平「お父さん。お土産は？」
佳代子「こら。贅沢は敵、でしょ」

しょんぼりする林平。
鷲野「戦争が終わったらな。それまで我慢できるか？」
うなずく林平。頭をなでる鷲野。
鷲野「えらいぞ。約束だ」
家から去る鷲野。見送る佳代子と林平。

○海軍省（夜）
海軍省・全景。

○海軍省・会議室（夜）
Ｔ・３月１０日
会議で言い争いを続ける軍人達。横山一郎（４５）と鷲野は隣同士。
海軍軍人１「敵は沖縄に接近。もはや戦力の差は絶望的」
海軍軍人２「大和があるではないか。天祐を信じ２０００万特攻の魁となればよい」
鷲野は発言しようとするが横山が黙って首を振り制止する。突如鳴り響く警報。ドアが開き伝令が入ってくる。
伝令「Ｂ２９の大編隊！　狙いは・・・」
唾を飲む伝令。
伝令「東京です」
驚く顔の鷲野は立ち上がる。

○東京の街（夜）
逃げ惑う人々。上空にはＢ２９の大編隊。燃え盛る東京。阿鼻叫喚。鷲野の表札。逃げる佳代子と林平。焼夷弾が燃え上がる。泣き叫ぶ佳代子と林平。

○鷲野宅・焼け跡
焼け跡に呆然と立ち尽くす鷲野。
誰もいない中、鷲野は膝を崩す。

○横須賀飛行場
緑の機体に日の丸が塗装された「一式陸攻」と輸送機。特攻機桜花を運ぶための輸送機の前に鷲野と杉浦、木村、

本庄、内田。その前に並ぶ新坂、吉田。
新坂と吉田は白マフラーの特攻服。
鷲野「新坂。吉田・・・。頼んだぞ」
こわばった顔の吉田。だが新坂が大きな声ではっぱをかける。
新坂「大和魂。見せてやります」
笑う新坂。作り笑いの鷲野。
鷲野「俺も後から行く」
新坂「大尉殿にはご家族がいます。死ぬのは我々で十分です」
吉田「お子さん。大きくなったでしょう」
黙って下をむく鷲野。
新坂「大尉殿？」
杉浦「大尉殿のご家族はこの前の空襲で・・・」
激怒する新坂。
新坂「クソッ！　鬼畜米英ども！　住宅街も爆撃しやがって」
吉田「仇はこの俺が！　敵艦もろとも吹き飛ばしてやります」
鷲野「日本は必ず勝つ。いや勝たせてみせる」
杉浦は「一式陸攻」に名前を刻む。名前には新坂、吉田、本庄、内田、杉浦、木村、鷲野の文字。
杉浦「俺達は仲間だ。この時、この瞬間は永遠だ」
涙目の杉浦。笑顔の新坂は敬礼した後、杉浦に形見のハチマキを渡す。新坂、吉田は皆に別れを告げ、輸送機に乗る。鷲野の拳は強く握りしめられている。

○海上・大空

海を覆うアメリカ艦隊。新坂たち特攻隊の乗る桜花が輸送機から発射されアメリカ軍の船を爆破。だが輸送機は大量のアメリカ軍機に撃墜される。炎とともに墜落。

○広島上空

T・8月6日　広島原爆投下
きのこ雲の原子爆弾。

○長崎上空
T・8月9日　長崎原爆投下
きのこ雲の原子爆弾。

○満州国境
T・8月9日　ソ連対日宣戦
平原を進撃するソ連軍戦車。逃げ回る日本軍。

○皇居前
T・8月15日
N・昭和20年8月15日。
日本はポツダム宣言を受諾し連合国へ降伏をすることとなった。だが戦争は終わってはいなかった。真の戦いはこの日よりはじまったのである。

○廃墟の東京
T・サレンダーミッション
〜8月の白い鳩〜

○横須賀航空隊飛行場・全景
青空の下、蝉の声。大騒ぎの飛行場。
「畜生」や「なぜだ」などの叫び声。

○同・格納庫
鷲野は「一式陸攻」の前で仲間達の名前が刻まれた跡に触れる。ラジオからは玉音放送。外から走ってくる音。開く扉。杉浦と十数人の横須賀隊員達。
杉浦「たった今、ラジオで陛下のお言葉が！」
虚空を見つめたままの鷲野。
杉浦「鷲野大尉！日本が敗れたのですよ！よいのですかこのままで」
黙っている鷲野。
杉浦「みんな言っております。無条件降伏など認めん、と。鷲野大尉。決起しましょう」
鷲野「下がってろ」
杉浦はムッとし敬礼し出て行く。

○総理官邸・全景

○総理官邸

座る東久邇宮首相（５８）に近づく重光葵（５８）。

重光「総理。陛下のお言葉がラジオにて放送。国民は終戦を知りました」

東久邇宮「街の様子はどうですか？」

重光「静まり返っています。やはり終戦の衝撃は大きいのかと」

東久邇宮「すべてが終わったか・・・」

重光「いえ。終わってなどおりません」

いぶかしげな顔の東久邇宮。

重光「ソ連との戦闘は続行。連合国との正式な戦闘終結もまだです」

重光は机に、連合軍から届いた通信書を置く。読み上げる重光。

重光「マッカーサーからです」

東久邇宮「読んでください」

重光「連合国最高指揮官は日本政府にフィリピン・マニラ市へ代表者の派遣を命ず。代表者は日本陸軍、日本海軍、日本空軍を代表する権限ある顧問を帯同するものとす」

東久邇宮「降伏軍使の派遣命令ですか」

重光「陸軍。海軍。空軍を代表する者。つまり・・・」

溜息をつく首相。

東久邇宮「軍人か・・・」

重光「昨日まで殺し合いをしていた相手に頭を下げるのです。死んだ方がマシと言う者がほとんどでしょう」

東久邇宮「でも行かねばなりません。早くしなければ戦争が再開してしまう」

○厚木飛行場・全景

○同・指令室

鋭い顔で外を見る小園安名（４３）厚木司令。泣いている部下達。

厚木隊員１「日本は降伏してしまうのか！

こんなことで陛下を守れるのですか」
小園「集めろ」
厚木隊員１「は？」
小園「この飛行場にいる３０００人。全てを集めろ」
厚木隊員２「司令！」
小園は部屋を出て行く。

○横須賀基地・飛行場・格納庫

「一式陸攻」の前の机で手紙を書き終える鷲野。封筒には「遺書」の文字。

○同・宿舎・廊下

歩いている内田。ふと内田が見ると荷造りをする本庄。
内田「おい、本庄。何してる」
本庄「何って？　荷造りさ」
内田「は？」
本庄「戦争は終わったんだ。家に帰るさ」
内田「お前！」
本庄に掴みかかる内田。
内田「この大事な時に！」
本庄は内田の腕を振り払う。
本庄「戦争が終れば軍も終わり。そのうちお偉いさんから解散命令がくるぞ」
皮肉な笑いで荷造りをする本庄。
何も言い返せない内田。

○マニラ・アメリカ軍司令部

○同・司令室

椅子に座るマッカーサーと直立不動の部下たち。マッカーサーが見る世界地図にはサイパン、硫黄島、沖縄に星条旗がささっている。マッカーサーは星条旗を日本本島に突き刺す。
パイプに火をつけるマッカーサー。
部下２「(英語) 真珠湾の屈辱から３年半。今日の日をどれだけ待ち望んだか」
部下１「(英語)これも原子爆弾のおかげです」

マッカーサーは下を向く。
マッカーサー「(英語) 日本はポツダム宣言を受諾した。お前たちはどう考える？」
部下１「(英語) ペリリュー、硫黄島、沖縄。特攻隊。あれだけの抵抗を見せた国が簡単に降伏するはずがありません」
部下３「(英語) 奇襲は奴らの得意技。隙をつき攻撃してくる恐れも」
サングラスを取るマッカーサー。
部下２「その場合、多大な犠牲が出る恐れも」
マッカーサー「ならばどうする？」
部下「少しでも抵抗の素振りを見せたなら徹底的に報復を。Ｂ２９の大編隊で再度日本を焼け野原にしましょう」
部下３「・・・。場合によっては３発目の原子爆弾も・・・」
煙をくゆらすマッカーサー。
マッカーサー「(英語) 既に降伏軍使を送るように伝えた。だが時間稼ぎをさせるな。一分一秒でも早く来させるのだ」
鋭い顔つきのマッカーサー。

○首相官邸

腕を組む東久邇宮。話す重光。
東久邇宮「軍使には誰を？」
重光「海軍はアメリカから指名された人物が」
敬礼をして入ってくる横山一郎（４５）
海軍少将。
重光「元、駐米武官で海軍省主席副官、横山少将。開戦前から対米戦には反対の立場をとっておりました」
横山「米内海相より最後の御奉公と思い受けてくれと言われました」
東久邇宮「開戦時はワシントンにいたとか？」
横山一郎「結局、開戦となってしまいましたが。終戦でもアメリカと交渉するとは・・・」
東久邇宮「辛い役目。頼みます」
立ってお辞儀をする東久邇宮。敬礼し去ろうとする横山は扉の前で振り返る。
横山「マニラ行きの件。どうしても連れてい

きたい人物がいるのですが」
東久邇宮「？」
横山「飛行時間一万七千時間の海軍きっての天才パイロット。数々の空中戦を生き抜いた強運の持ち主です」
東久邇宮「それは心強い。ぜひ」
部屋を出て行く横山。横山が去った後。
東久邇宮「頼もしいかぎりだね」
重光「それがそうとも」
不思議そうな顔の東久邇宮。
重光「軍使には陸軍も派遣しなければなりません。しかも全権は陸軍です」
溜息をつく東久邇宮。
重光「日本の海軍と陸軍の仲の悪さは世界一。あちらで大喧嘩でもして交渉が決裂すれば」
頭をかかえる東久邇宮。
東久邇宮「陸海軍が協力してればこれほどの無様な負け方はしなかった。などと言ってもせんないことか・・・」

○瓦礫の街

瓦礫の街を自動車が走る。

○自動車の中

焼け野原の街を眺める横山。
横山「責任感の強いやつのこと。死んでなければよいが」

○横須賀海軍基地・飛行場・格納庫

「一式陸攻」の前で家族写真と仲間の写真を見る鷲野。机には遺書。鷲野はピストルを咥え引き金を引こうとする。
横山の声「その命。俺にくれないか？」
ハッとする鷲野。振り向くと横山。
鷲野「横山少将」
敬礼をする鷲野。だが横山は敬礼を返さない。
横山「極秘任務が下された。人を探している。死を恐れず。それでいて命がけで任務を遂

行する男。心あたりないか？」
そっぽを向く鷲野。
横山「ミッドウェイ、タワラ、ラバウル。数多の空戦を生き抜いた男なんだがね」
鷲野「皮肉はやめてください。私はすでに死んだ人間も同じ・・・」
さえぎる横山。
横山「日本人、皆が死んだ。戦争のためだけに生きてきたのが負けたのだからな」
横山は一式陸攻を触る。
横山「もう日本に飛べる飛行機も数えるほど。だが俺は軍使としてマニラに行かねばならなくなった」
鷲野「軍使？　何のために？」
横山「戦争を終わらせるためだ」
鷲野「もう終わったではありませんか」
首を振る横山。
横山「国際社会では、降伏文書に調印して初めて戦争を終わらせられる」
険しい顔の横山。
横山「まだ戦争は終わっていない」
驚く顔の鷲野。
横山「関東軍は満州でソ連軍と。ソ連の別部隊は千島列島に進撃しており、今にも北海道を占領する勢いだ」

○千島列島
進軍するソ連軍。
ソ連軍士官「(ロシア語) ４０年前の日露戦争の敗北。先祖の屈辱を我らが払うのだ」
敗退する日本軍。空ではソ連航空隊と日本航空隊が空中戦を繰り広げるが日本側が敗退。

○千歳基地
着陸するゼロ戦。降りてくる木村。
木村「ソ連め。本土には上陸させんぞ！」
整備兵がやってくる。
木村「皆が戻ったら小休止。１２００に、再度出撃。しっかり整備しといてくれ」

整備兵「木村飛曹長。それが・・・」

○同・指令室

上官の前に立つ木村は敬礼する。

上官「急で驚くかもしれないが、命令が届いた。今より横須賀基地へ行け」

木村「横須賀？　今はソ連の侵攻を・・・」

上官「こっちは我々で何とかする」

木村「し、しかし」

上官は近寄る。

上官「(小声) 極秘任務らしい。詳しいことはあちらで聞け」

木村「極秘任務？」

○横須賀航基地・飛行場・格納庫

鷲野に語る横山。

横山「降伏文書に調印しない限り、ソ連は日本への侵攻を止めないだろう。このままソ連に北海道を占領されたらどうなる？　日本は分断国家にされてしまうぞ」

鷲野「・・・・・・」

横山「それにこのままだと戦争継続のために反乱を起こす者も出てくる。そうなればアメリカが怒って三発目の原子爆弾を落とす可能性も・・・・・・」

鷲野「・・・。私に何をしろと？」

横山「俺を含めた軍使をマニラに運んでほしい。真の空の男にしか頼めない任務だ」

迷う鷲野。横山は鷲野の銃を取上げる。

横山「死だけが責任をとる方法ではない」

横山は鷲野の肩をつかむ。

横山「生き残った者はやらねばならないことがある。これは選択ではない。義務だ」

ハッとする鷲野。

横山「日本の危機だ。生きろ」

鷲野「・・・・・・。わかりました」

横山は頷き去る。残された鷲野。家族写真と部下たちの写真を取り出す。

鷲野「もう少し待っててくれ」

笑顔の後、真剣な顔になる。

○首相官邸
首相の前に立つ河辺虎四郎（５５）陸軍中将。
重光「河辺中将。終戦前は本土決戦を主張。しかし陛下のご聖断以降は、早期講和に転換。陸軍を制御できるうえ、陛下への忠誠心から選抜しました」
東久邇宮「よく受けてくれました」
河辺「恥多き任務。誰かがいかねばなりますまい。だがアメリカ側に陛下への侮辱が少しでもあるならこちらにも考えがある」
東久邇宮「考え、というと？」
河辺「国体の護持こそ最優先。降伏調印、連合国の裁判、それらに陛下をお呼びする不届き千万な要求があった場合・・・・・・」
東久邇宮「場合？」
ぎろりとにらむ河辺。
河辺「陛下をお守りするため、即座に自決する。それでもよろしいか？」
東久邇宮と重光は緊張した面持ち。

○横須賀基地・教官室
Ｔ・８月１６日
鷲野の前に立つ内田と本庄と木村。
内田・本庄・木村「降伏軍使！？」
大声で驚く三人。
鷲野「声が大きい！　誰かに聞かれたらどうする！」
慌てて静まる三人。
木村「し、しかし。急に呼ばれたと思ったら」
内田「降伏軍使だなんて」
鷲野「今、日本は最大の危機を迎えている。信頼できるお前達の力が必要なのだ」
鷲野は力強く語る。木村は頷く。
木村「俺は南方で大尉に助けてもらいました。断る理由はありません」
内田「自分も大尉の頼みとあらば・・・」
鷲野「命の保証はできない。それでも来てくれるか？」
緊張する木村と内田。話を遮る本庄。

本庄「戦争が終わったのにどうして！　俺はゴメンですよ」
木村「本庄！　お前、どれだけ大尉に助けてもらったか。忘れたのか！」
本庄「恩はありますよ。ですがね。もう戦争は終わったんだ。俺は自由にさせてもらいますよ」
木村「てめぇ」
殴ろうとする木村を止める鷲野。
鷲野「本庄。優れた通信技術のあるお前が必要なんだ。頼む」
震える本庄。
本庄「・・・・・・。自分には無理です。それにいずれ軍は解散。命令を受ける義務も無いです。他の人に頼んでください」
出て行く本庄。
木村「臆病者！」

○首相官邸
歩いている東久邇宮と重光葵。
東久邇宮「すべては決まった。ただちに横須賀から出発してもらう」
重光「首相。軍人だけでは交渉がどうなるか。どうか彼も連れて行ってください」
岡崎勝男（４８）が入ってくる。
重光「岡崎勝男。外務省きってのカミソリ男。パリ五輪にマラソンで出場した経歴もある体力自慢の男です」
岡崎「よろしくお願いします」
重光「彼なら対立する陸海軍の間でアメリカとの交渉を上手くやってくれるかと」
階段を下りる首相と重光。
慌てて走ってくる部下。
部下「た、大変です！」
東久邇宮「どうした！」
部下「あ、厚木が」
重光「落ち着け」
部下「厚木基地が反乱を起こしました」
顔面蒼白となる東久邇宮と重光。

○厚木飛行場・全景
３０００人がずらりと並ぶ飛行場。

○同・広場
壇上に立つ小園。大音量のマイクで演説を開始。
小園「日本は連合軍への降伏を宣言した。だが、このような大逆の命を発する当局は、逆賊以外のなにものでもない」
ざわざわしはじめる３０００人。
小園「降伏の勅命は真の勅命ではない。これより、我等厚木航空隊は部隊の独立を宣言。アメリカをはじめ連合国に対し徹底抗戦の火蓋を切るぞ！」
大歓声を上げる３０００人。
隊員１「仇を討て！」
隊員２「まだまだやれる！　アメリカをぶちのめせ！」
小園は胸から紙を取り出す。
小園「全国の部隊に激を発する！　上層部の腰抜けどもめ！　我等の大和魂見せてくれるわ！」
「うおおおおおお」という歓声。

○同・滑走路
次々と飛び立つゼロ戦部隊

○横須賀飛行場
厚木から来たゼロ戦部隊は檄文を空から撒く。大量の檄文が空から落ちる。拾う隊員達。檄文に書かれた文字。「国民諸子に告ぐ。天皇の軍人には絶対に降伏無し」。
横須賀隊員「まだ日本は負けてない！　戦う仲間がいるぞ！」
駆け寄ってくる仲間。やるぞ！の声。

○同・教官室
鷲野は地図を見ながら計算。沖縄までの道中を計算。バタッとドアが開く。

杉浦「鷲野大尉！　見てください」
　喜ぶ杉浦は厚木の決起文を見せる。
杉浦「厚木が決起しました。横須賀も起ちましょう。鷲野さんがいれば百人力」
鷲野「杉浦。戦争はもう・・・・・・」
　鷲野の言葉が耳に入らない杉浦。泣き始める杉浦
杉浦「新坂。吉田。待ってろ。俺も必ず逝く。アメリカ共を道連れにしてな」
　黙る鷲野。
杉浦「裏切り者は見つけ次第、監禁します。抵抗するなら射殺も辞さず、です」
　驚きながらも、うなずく鷲野。
杉浦「我々は永遠の仲間です」
　笑顔の杉浦。緊張する鷲野。

○同・広場

　荷造りを終えた本庄。大騒ぎの広場。
　檄文が本庄の手に落ちてくる。
本庄「徹底抗戦！？　やっと戦争が終わったのに。冗談じゃない！」
　その声に反応する横須賀軍人達。
横須賀軍人１「貴様！　今、何と言った！」
横須賀軍人２「裏切り者だ。殺せ！」
　軍人達が本庄を追う。逃げる本庄。

○首相官邸

　東久邇宮の前に並ぶ河辺、横山、岡崎。
東久邇宮「厚木が反乱を起こした。もはや一刻の猶予もない。急ぎ沖縄の伊江島を経由しマニラへ向かってほしい」
横山「首相。厚木に近い横須賀は危険です。木更津から出発しましょう」
東久邇宮「分かった。そうしてくれ」
　横山を睨む河辺。
河辺「厚木の司令は小園司令だったな？」
横山「ええ。曲がったことが大嫌いな部下想いの男でしたが・・・・・・」
河辺「アメリカが厚木の反乱を戦争継続の意思とみなしたらどうなる？」

岡崎「彼らの頭にあるのは徹底した報復。容赦ない反撃が待っていることでしょう」
大声になる河辺。
河辺「これだから海軍は！　終戦も抗戦も何もかも中途半端。我ら陸軍は、やるなら全軍でアメリカと戦ってみせるのに」
叫ぶ河辺。
河辺「戦争は外交の延長。本土決戦でアメリカに打撃を与えれば、アメリカに無条件降伏を諦めさせることができるのだぞ」
河辺をおさえる横山。
横山「あなたがそんなことでどうするのです！　私達は降伏軍使なのですぞ！」
河辺「海軍はアメリカにことごとく船を沈められた負け犬。我ら陸軍は外地に数百万の精鋭がいる。一緒にするな」
横山「負け犬だと！」
興奮して立ち上がる河辺と横山。
東久邇宮「やめなさい！　今は争っている時ではない！」
怒鳴る東久邇宮。黙る河辺と横山。
東久邇宮「決してアメリカに厚木の反乱を知らせてはなりません。その上で反乱軍鎮圧の時間稼ぎをし、降伏調印をしてくる。これがあなたがたの任務、サレンダーミッションです」

○横須賀基地・建物内

本庄を探す横須賀隊員達。
横須賀隊員１「どこへ逃げた！」
横須賀隊員２「追え！」
通路に追い詰められる本庄。
本庄「クソッ。こんなところで。美知子……」
諦める本庄。本庄の足元のタイルが開き鷲野が出てくる。
鷲野「秘密通路だ。来い」
本庄は鷲野についていく。

○同・地下通路

無事逃げた本庄は鷲野と走る。

鷲野「ここは危険だ。逃げるぞ」
本庄「逃げる？　どこへ？」
鷲野「・・・・・・」

○同・飛行場

横須賀隊員1がピストルを持って警戒。
本庄を探している。
横須賀隊員1「どこへ行った」
エンジンの音とともに格納庫が開く。
「一式陸攻」がプロペラを回し離陸。
横須賀隊員2「追え！　逃がすな！」
隊員達はピストルを撃つが弾は届かず。

○空

空を飛ぶ一式陸攻。

○一式陸攻・コクピット・

運転する鷲野。木村。内田。他数名の搭乗員達。
本庄「どこへいくのですか？」
鷲野「木更津だ」
本庄「木更津？　なぜ？」
内田「木更津なら反乱軍の総本山、厚木の航空隊から逃げられるからね」
本庄「木更津からマニラへ行くのか？」
木村「俺と内田は鷲野大尉についていく。それだけだ」
本庄は下を向く。

○横須賀基地・広場

走る横須賀軍人。報告を受ける杉浦。
横須賀軍人「杉浦飛曹長。鷲野大尉他数名が一式陸攻で飛び立ちました」
杉浦「大尉が？　なぜ・・・」
横須賀軍人「どうやら極秘任務らしく……。マニラに降伏軍使を派遣するとか」
杉浦「降伏軍使だと！！」
唖然とした後、激怒し地団駄を踏む杉浦。ピストルを空に打ちまくる杉浦。
空になるピストル。打ち続ける杉浦。

ピストルを地面に投げつける杉浦。
杉浦「陛下を。日本を。国民を守るのが俺らじゃなかったのか！」
怒号を発し、地面を殴る杉浦。何度も殴り、こぶしが血まみれになる。杉浦は冷酷な顔になる。
杉浦「許さん」

○木更津基地
着陸する一式陸攻。

○同・飛行場
横山、河辺、岡崎が出迎える。
降りる鷲野、内田、本庄、木村が敬礼。
返礼をする横山、河辺。
岡崎「あと数時間で出発しなければなりません。しかしマッカーサーは」

○同・格納庫（夜）
周囲には銃を装備し警備する兵士。
ドラム缶に積まれた山のようなペンキを見て驚く鷲野。
鷲野「これは？」
岡崎「マッカーサーの指令です。降伏軍使機は白塗りして、日の丸を消し、緑の十字を描くようにと」
木村「緑の十字？」
岡崎「仁愛を意味します」
鷲野「ではその白塗りの機体はどこに？」
下を向く横山。
横山「これから皆で塗装するのだ」
驚く鷲野、内田。
内田「まだ塗ってないのですか！　木更津の隊員に命じればすぐにでも・・・・・・」
横山「だめだ。彼らの多くがこの任務に反対している。そのため隙あらば妨害してくる」
岡崎「ああやって警備してもらってなんとかなっている状態です」
岡崎は警備の兵士を指さす。
怒り出す河辺。

河辺「これだから海軍は！　陸軍なら下が上に歯向かうなど考えられんことだ」
横山「今はそれよりやれることをやるしかないでしょう」

○同・飛行場・倉庫（夜）
ドラム缶を運ぶ内田。

○本庄の家・玄関（夜）
玄関を叩く本庄。「はい」の声で開く扉。本庄美知子（２０）が出てくるが、本庄を見て驚き美知子は涙目になる。
美知子「あなた！」
抱き合う本庄と涙が止まらない美知子。
本庄「先ほど、木更津基地に着いた」
美知子「よかった。本当に・・・・・・」
美知子は笑顔で話す。
美知子「疲れたでしょう。上がって」
動かない本庄。
美知子「あなた？」
本庄「戦争は終わった。だが行かなきゃならなくなった」
美知子「行かなきゃって・・・・・・。どこへ？」
本庄「俺を必要とする人のところだ」
美知子「戦争が終わったのに。どうして！」
下を向く本庄。
本庄「すまない」
走り去る本庄。号泣する美知子。

○木更津飛行場・格納庫（夜）
鷲野、木村以外、ペンキで「一式陸攻」を白く塗る。しかし人数が足らずはかどらない。
河辺「どうして俺がこんなことを・・・。鷲野はどうした。なぜ手伝わない！」
横山一郎「彼はパイロットです。睡眠も立派な仕事です」
黙る河辺。
岡崎「果たしてこの人数で間に合うの

か・・・・・・」

○同・宿舎（夜）

寝る鷲野と木村。外から女性達の泣き声。鷲野と木村は飛び起き外に出る。

○同・外（夜）

３０人近くの女学生が泣いている。近づく鷲野と木村。

鷲野「君たち！　何があった！」

泣き続ける女学生。木村は見渡す。

木村「(小声)どうやらここで働いている女子挺身隊みたいですね」

一人の女子学生が泣きながら前に出る。

女子学生「日本が負けたって本当ですか？」

鷲野「・・・・・・。ああ。残念だが」

女子学生は泣き始める。

女子学生「みんなアメリカ兵に殺されるって聞いて・・・」

女子学生達の泣き声が大きくなる。どうしたらいいかわからない木村。はっぱをかける鷲野。

鷲野「泣くのは明日にでもできる！」

ビクッとする女学生たち。諭す鷲野。

鷲野「よく聞いてほしい。確かに日本は負けた。だが今、君達の力が必要なのだ」

女子学生「私たちが・・・。必要？」

鷲野「ああ。俺たちはある任務のため飛行機を白く塗らなければならない」

木村「そのためには一人でも多くの力が必要なんだ」

女子学生の誰かの声。

女子学生２「(小声)自分達は寝てたくせに？」

プッと吹き出す女子学生達。笑いをやめようとするが止まらない女子学生達。

木村「パイロットは寝るのも仕事なんだよ」

あきれ顔の木村。

鷲野「手伝ってくれるかい？」

女子学生はお互いの顔を見合わせる。

○同・格納庫（夜）

ペンキで「一式陸攻」を白く塗る河辺、横山、岡崎、内田。

河辺「あと2時間しかない。間に合うのか！」

横山「口よりも手を動かしてください」

河辺「もとはといえば海軍が」

横山「今はそんなこと・・・」

鷲野が入口から入る。あとからぞろぞろ入ってくる女学生たち。

女学生「これで良いですね？」

１００人近くの女学生が白ペンキで塗装を始める。黙々と作業を始める女学生達。手が止まる河辺。

岡崎「ありがとう！」

女学生達は笑顔になる。皆作業を再開。

○同・全景

朝日が昇り飛行場全体を照らす。

○同・格納庫

外に出ようとする鷲野と木村。入口には下を向いている本庄。

木村「なんだ、お前か・・・」

黙っている本庄。

木村「俺達は一刻も早くマニラへ行かなきゃなんねんだよ。邪魔だけはすんな」

本庄の前から去ろうとする2人。

本庄「させない」

木村「は？」

本庄「あいつら本土決戦なんてぬかしやがった。そんなことになれば今度こそ日本は終わりだ」

頷く鷲野。

本庄「これ以上、日本を戦場にさせない。美知子のため（小声）。俺も行きます」

笑顔で頷く鷲野。

○同・格納庫

白く塗装された「一式陸攻」。日の丸部分だけが赤い。皆、塗るのを躊躇。鷲

野が勢いよく日の丸を白く塗る。
鷲野「これはもう『一式陸攻』ではありません。降伏軍使を運ぶ平和の白い鳩です」
全員がハッとする。
鷲野「誰か、緑のペンキを持ってきてくれ。十字に塗るぞ」

○同・飛行場

T・8月19日

白塗りの緑十字が施され生まれ変わった「一式陸攻」(以下、緑十字機)。「緑十字機」の前で整列する、鷲野、横山、河辺、岡崎、木村、本庄、内田、他数名。天幕を張って、白布をかけたテーブルに冷酒と勝栗(特攻隊の出撃と同じ)。木更津長官が音頭をとる。皆茶碗の冷酒で乾杯。

○木更津飛行場

離陸する緑十字機。

○マニラ・アメリカ軍司令部

パイプを吸うマッカーサー。部下がマッカーサーの前に立っている。
マッカーサーの部下「(英語)降伏軍使がこちらに向かったと情報が入りました」
マッカーサー「(英語)そうか」
マッカーサーの部下「(英語)ところで将軍。白い塗装とはどういった意味が?」
マッカーサー「(英語)平和の鳩は白いだろう」
マッカーサーの部下「(英語)なるほど」
感心する部下。呟くマッカーサー。
マッカーサー「(英語)バターン」
マッカーサーの部下「(英語)え?」
マッカーサー「(英語)コールネームだ。緑十字機はバターンと呼ばせろ」
マッカーサーの部下「(英語)バターン。死の行進・・・・・・。私も戦友が。恨みは消えません」
首を振るマッカーサー。

マッカーサー「恨みではない。死んでいった仲間達への弔いだ」
険しい顔のマッカーサー。

○緑十字機・コクピット
操縦している鷲野と木村。
鷲野「空を飛ぶ瞬間。この時だけは何もかも忘れ、己と空が一つになれる」
木村「大尉は詩人ですね」
鷲野「からかうな」
ニヤリと笑う木村
木村「いざ沖縄」

○緑十字機・機内
河辺が部下の陸軍軍人を呼びつける。
河辺「おい。皆に渡せ」
部下の陸軍軍人が鞄を持ってくる。
陸軍軍人がカバンを開くと中には人数分のピストル。
河辺「全員分のピストルだ。持っていろ」
ピストルをみて躊躇する内田。
内田「ご、護身用とはいえ危険では？　アメリカを警戒させてしまいます」
河辺「何をいっている？」
鋭い目つきの河辺。
河辺「自決用だ」
驚愕の横山と内田と岡崎。
河辺「もしアメリカが陛下を侮辱した場合、俺はその場で腹を切る。当然、おまえらにも死んでもらう」
横山「そうさせないのが我らの任務では？」
にらみ合う河辺と横山。
ピストルを持って驚く岡崎。
岡崎「（小声）わ、私は軍人ではないのに」

○厚木基地・司令室
小園司令の前に立つ杉浦。
小園「ありがとう！　横須賀から我らの決起に賛同してくれるとは」
杉浦と握手する小園司令。

杉浦「司令。木更津から降伏軍使が沖縄へ向かったとのことです」
小園「降伏などさせん！　我々は戦い続けるぞ」
杉浦「ではどうされますか？」
小園「ただちに戦闘隊を送り降伏軍使機を撃墜させよう」
杉浦「私も行きます！」
　にやりと笑う小園司令。
小園「頼んだぞ」

○厚木基地・飛行場
　飛び立つゼロ戦部隊。

○杉浦の乗るゼロ戦
　操縦する杉浦。杉浦は鷲野を含めた仲間たちとの写真を見る。
杉浦「裏切者め。許さん」
　杉浦は新坂の形見のハチマキをつける。

○緑十字機・機内
　機内にいる河辺、横山、岡崎、内田、本庄、他数名。本庄が通信機を操作。
　驚く本庄。
本庄「只今、通信が入りました！厚木から戦闘隊が発進した模様」
　驚く皆。
本庄「『降伏軍使機を発見次第撃墜しろ』、とのことです」
河辺「安心しろ」
　河辺が口を開く
川辺「白く塗装した機体は絶対撃墜するな、と全軍に指示しておいた。狙われることはない」
　怒る横山。
横山「なんてことを！　そんなことを伝えれば緑十字機が降伏軍使機と教えているようなものですぞ！」

河辺「陸軍は陸軍のやり方がある。そもそも厚木は海軍の管轄。撤退するよう、伝えろ」
横山「それができれば・・・・・・」
岡崎「今は争ってる場合ではありません！」
横山は鷲野に大声で問う。
横山「鷲野！　どうする！」
鷲野「私に考えが」
操縦席で鋭い目つきの鷲野。

○厚木ゼロ戦部隊
空を飛ぶ厚木のゼロ戦部隊。遠くに空を飛ぶ機体を発見する。

○杉浦の操縦するゼロ戦
通信機で聞こえる厚木パイロット1、2の声。操縦する杉浦。
厚木パイロット1の声「一気呵成にせめろ」
厚木パイロット2の声「悪く思うなよ。昨日の友は今日の敵だ」
杉浦「昨日の友・・・・・・」
その声でハッとし仲間たちとの写真を再度見る杉浦。目をつぶり開く杉浦。
杉浦「ま、待て！　お前ら待つんだ！」
厚木パイロット1、2「？」
杉浦「まずは説得だ。降伏軍使を諦めさせよう。撃つのはそれからでもいいだろ？」
厚木パイロット1の声「何を悠長なことを」
ダダダっと機関銃の音。慌てる杉浦。
杉浦「待て！　待つんだ！」

○青空
逃げる飛行機。追う厚木ゼロ戦部隊。
追いつく厚木ゼロ戦部隊。

○杉浦の操縦するゼロ戦
通信機で叫ぶ杉浦。
杉浦「お前ら。だめだ！　やめるんだ」
厚木パイロットの声「待て！　違うぞ」

不思議な顔の杉浦。杉浦の視線の先には緑に日の丸の機体。無線機から声。
厚木パイロット１の声「降伏軍使機は白の機体に緑の十字。話と違うぞ」
厚木パイロット２の声「ならこれは？」
厚木パイロット１の声「クソッ！　囮だ！
騙された！」
ホッとする杉浦。

○緑十字機・機内

操縦する鷲野。
鷲野「こんなこともあるかと思い、囮機の発進を命じておきました」
横山「さすがだな」
不満げな河辺。
河辺「厚木航空隊もバカではない。囮に気づいてこちらに向かったはず」
鷲野「ご安心を。我々は太陽を前に海面スレスレをジグザグ進んでおります。これでレーダーにも探知されません。騙せます」
河辺「理屈はそうかもしれん。だが！」
鷲野「理屈ではありません。私はこの方法でタワラで生き延びました」
フッと笑う横山。不貞腐れる河辺。

○神社

何度も神社でお参りをする美知子。
美知子「どうかあの人をお守りください」

○廃墟の街

廃墟の街を力なく歩く人々。
走る公用車。廃墟を見る重光
重光「見渡す限りの焼け野原。何もかも無くなってしまいました」
東久邇宮「いえ。まだあります」
重光は不思議そうな顔。
東久邇宮「人です。生き残った人々です」

東久邇宮「しかし戦争再開となればその人も
死に絶え日本は滅びます。何としてでも
降伏調印をせねば」
重光「そのためにあそこへ行くのですね」
うなずく東久邇宮。

○空を飛ぶ緑十字機
青空と海。空の向こうから戦闘機群。

○緑十字機・コクピット
操縦する鷲野と木村。空の向こうの戦
闘機群が目に入り驚く木村。
木村「敵機襲来。戦闘体制！！」
皆。ガバッと警戒する。
鷲野「木村、見間違えるな」
空の向こうにはグラマン機。
鷲野「迎えにきたアメリカ機だ。もう敵では
ない」
木村「そ、そうでした。反射でつい」
間に入る内田。
内田「皮肉なものです。昨日までの味方に殺
されかけて、昨日までの敵に護衛される
とは」
本庄「戦争なんてそんなもんさ。上の都合で
敵も味方もすぐに入れ替わる」
突如、通信機が鳴る。
通信機に答える本庄。
本庄「this is bataan one. this is bataan one. mokka, can you hear me?（こちらバターン。モッカ。聞こえますか？）」

○沖縄・伊江島
大勢のアメリカ兵士たちが飛行場で待
つ。ラジオで流れる本庄の声

○マニラ・連合軍総司令部・総指令室
腕を組むマッカーサー。ラジオから流
れる**本庄の声**「this is bataan
one. this is bataan one. mokka, can
you hear me?」

○ラジオで世界中に放送される本庄の声

○沖縄・伊江島

馬鹿騒ぎするアメリカ兵士達。アメリカ海軍士官スティーブ（３４）と日系アメリカ軍兵士マサユキ・パットン・コモリタ（２５）。

アメリカ兵１「（英語）やっと戦争が終わるぜ」

アメリカ兵２「（英語）こりゃ見ものだな」

マサユキ・パットン「（英語）どうしますか？　この野次馬」

スティーブ「（英語）馬鹿どもが。特攻の可能性も考えられんのか」

不満げなスティーブはその場を去る。野次馬の中にはラジオ放送をしているアナウンサー。

アナウンサー「（英語）この飛行機は長く待ち望んだ平和を運んで飛んでいます。滑走路の脇で見守るアメリカ兵の表情は希望に満ち溢れています」

○同・高射砲前

高射砲の前で準備するアメリカ兵。スティーブは兵士に命令。

スティーブ「まだ戦争は終わったわけではない。少しでも怪しいそぶりを見せたなら撃ち落とせ！」

○沖縄・伊江島上空

空を飛ぶ緑十字機。

○緑十字機・機内

横山が口を開く。

横山「どうした？滑走路を過ぎたぞ？」

○同・コクピット

操縦する鷲野と木村。

木村「大変です。フラップが降りません！」

鷲野「何！　フラップが降りないと速度を下げられん」

○沖縄・伊江島・高射砲前

スティーブとマサユキ・パットンと兵士たち。上空で回る緑十字機。

スティーブ「なぜ降りてこない？」

アメリカ兵士「ま、まさか。本当に特攻？」

険しい顔になるスティーブ。

スティーブ「高射砲用意」

○緑十字機内

慌て始める機内。

横山「鷲野。何とかならんのか！」

鷲野「もう一度、フラップを出してみます」

再度操縦する鷲野。

内田「ダメです。出ません」

○沖縄・伊江島・高射砲前

緑十字機は上空でぐるぐる回る。緑十字機に標準を合わせる高射砲。

スティーブ「時間だ。撃ち落とせ」

マサユキ・パットン「待ってください。特攻なら直ぐに突っ込んでくるはず。何か理由があるはずです。例えば故障とか」

スティーブ「故障・・・・・・」

○緑十字機・操縦席

慌てている木村。

木村「あちらさん高射砲を向けてきたぞ！」

鷲野「着陸しないのを不審がっているのだろう。本庄、通信は？」

本庄「ダメです！調子が悪く。大陸方向から妨害電波が」

木村「ソ連か。クソッ」

大きく息を吸って吐く鷲野。

○沖縄・伊江島・高射砲前

高速で飛んでくる緑十字機。

スティーブ「特攻か！？」

高速で滑走路に止まろうとするが再度、上空に上がっていく緑十字機。
スティーブ「何なんだ！　やつらは」
マサユキ・パットン「やはり故障です！　特攻ならとっくに自爆してるはず」
スティーブ「しかしあの速度で止まるのは不可能。どうする気だ」

○緑十字機・コクピット

操縦する鷲野。大声で話す。
鷲野「エンジン停止！　ブレーキかけろ！」

○伊江島・飛行場

滑走路を高速で着陸する緑十字機。車輪から火花。ものすごい勢いで止まる。緑十字機。すぐ先には、アメリカの輸送機。ギリギリのところでぶつからず止まる。

○緑十字機・機内

皆、ホッとした顔。
岡崎「し、死ぬかと思いました・・・」
木村「さすがです！」
皆、降りる準備をする。外を見ると滑走路の先は５０メートルの崖。
岡崎「一歩間違えれば大惨事。攻撃とみなされ戦争再開になっていたかも・・・」
驚く岡崎。
横山「よくやってくれた」
横山は鷲野の肩を掴む。河辺がくる。
河辺「天才パイロット・・・・・・。言うだけはあるな」
笑顔になる鷲野。

○伊江島・緑十字機

扉が開き河辺、横山、岡崎の順で降りる。しかしアメリカ兵たちが大喜び。
アメリカ兵士「（英語）おい。写真を撮っとけ。将来、高く売れるぞ」

アメリカ兵士たちは鷲野達を写真で撮りまくる。

河辺「（小声）不愉快極まりない」
河辺は腰に欠けた軍刀に手を伸ばしかけるが横山が止める。

横山「我らの任務は何でしたかな？」
ハッとする河辺。

河辺「わかっておる」
スティーブが英語でアメリカ兵士達に怒鳴る。やじ馬たちがパッと散る。
軍使たちの前で英語で語るスティーブ。岡崎が皆に通訳する。

岡崎「我々軍使はアメリカの輸送機に乗り換えこのままマニラへ行きます。残りの者はここ伊江島で待つようにとのことです」

横山「行ってくる」
敬礼する鷲野。険しい顔の河辺が間に入る。

河辺「交渉次第ではお前たちも」
河辺は指でピストルの形を作りこめかみにあてる。

河辺「覚悟はしておけ」
緊張した面持ちの鷲野達。

横山「行きますぞ」
去っていく軍使達。スティーブは鷲野に近づく。睨むスティーブ。

スティーブ「（英語）日本人め」
去っていくスティーブ。鷲野は話す。

鷲野「内田。フラットが降りなかった原因を調べよう。ついてきてくれ」
内田と鷲野は去る。残される木村達。

○アメリカ軍輸送機
空を飛ぶ輸送機

○同・内部
豪華な内装の中で座る河辺、横山、岡崎。周りにはアメリカ兵達。

横山「マッカーサーとの交渉。吉と出るか凶と出るか」

○伊江島・宿舎前

呆然と立つ木村、本庄、他搭乗員達。遠巻きに囲むアメリカ兵のやじ馬たち。一人のアメリカ兵が英語で笑う。

木村「この野郎。やるってのか？」

木村はアメリカ兵を睨む。

マサユキ・パットン「疲れただろう。こちらで休め。彼はそう言っています」

木村たちの前に現れるマサユキ・パットン。彼の姿をみて驚く木村。

本庄「なぜ日本人が？　まさか捕虜？」

マサユキ・パットン「違います。私は捕虜ではありません」

木村「捕虜じゃねえなら何だ！」

興奮気味の木村。

マサユキ・パットン「私はれっきとしたアメリカ兵士。ただしあなた達と先祖を同じくする日系アメリカ人です。祖父が福島からハワイへ移住しました」

本庄「日系移民・・・・・・」

○厚木基地・指令室

小園の前に立つ杉浦。

杉浦「申し訳ありません。降伏軍使機を逃がしてしまいました」

小園は杉浦をにらむ。

小園「貴様。撃墜命令を躊躇ったとか」

戸惑う杉浦。

杉浦「あ、あれは囮機だったため・・・」

小園「囮と判明する前から躊躇ったと聞いたぞ」

睨む小園。

小園「まさか奴らのスパイか？」

頭を下げる杉浦。

杉浦「も、申し訳ありません。相手がかつての上官だったため躊躇いました。スパイなどでは決して・・・・・・」

小園「喝！」
小園は軍刀で抜刀。杉浦のハチマキが綺麗に斬られる。驚く杉浦。
小園「未練は断ち切れたか？」
慌てて敬礼する杉浦。
小園「よろしい。次の作戦だ。今度こそ戦争再開の狼煙にするぞ。ただちに出発しろ」
にやりと笑う小園。

○緑十字機前
緑十字機の故障の原因を調べる内田。
内田「故障の原因は部品の劣化でした。しかし部品が無いため交換出来ません」
鷲野「出来ないではない。何とかせねば！」
困った顔の内田。

○沖縄・伊江島・食堂
マサユキ・パットンに食堂に案内される木村、本庄。
マサユキ・パットン「好きなものをどうぞ」
食堂の大きさと食料の豊富さに驚く木村、本庄。
マサユキ・パットン「ではまた」
去っていくマサユキ・パットン。

○フィリピン・マニラ・飛行場
飛行場に着陸するアメリカ軍輸送機。
輸送機から降りる軍使達。飛行場は伊江島とは違い厳戒態勢。アメリカ兵達が険しい顔で銃を持ち整列。鋭い目つきで軍使達を睨んでいる。
横山「（小声）まだ戦争中のようだな」
出迎えるマシューバー大佐（４５）。
河辺は握手をしようと手を出すが、マシューバー大佐は手を引っ込める。場の雰囲気が張り詰める。
岡崎「（英語）お二人とも任務を第一にする軍人です。握手は講和後までとっておきましょう」

河辺もハッとし頷きマシューバー大佐も頷く。岡崎の機転に安心する横山。

○緑十字機内

機械を調べる内田。鷲野がくる。

内田「大尉。やはり無理です。部品も何もかもが無く・・・・・・」

鷲野の後にはアメリカ兵の整備士達。驚く内田。

内田「彼らは？」

鷲野「アメリカの整備士達だ。協力してくれると言っている」

内田「し、しかし敵に機体をいじらせるのは」

鷲野「もう敵ではない。それに緑十字機が無事に帰還し戦争が終わるのは彼らの望みでもある」

内田はしぶしぶ頷く。

鷲野「ここは俺がやっておく。お前は木村達と休んでいろ」

敬礼後、移動する内田。

○フィリピン・マニラ市街・廃墟

車で移動する軍使達。

○同・車内

後部座席の河辺、横山、岡崎。窓の外は廃墟。

横山「マニラも東京と同じ。廃墟です」

外からフィリピン人が石を投げる。窓にあたる石。

フィリピン人１「バカヤロー」

フィリピン人２「コラー」

アメリカ人運転手「（英語）やめるんだ！」

外のフィリピン人は軍使をにらむ。

横山「相当、恨まれてます」

河辺「日本軍はフィリピンをアメリカから独立させるためにきたのだぞ。なぜ！」

岡崎が冷静に話す。

岡崎「その結果がこの廃墟です。そして日本は敗れました」
黙ってしまう河辺。

○同・港（夕）

港に停泊するアメリカ戦艦群。その数は港を覆いつくすほどの数。
唖然とする河辺、横山。
河辺「これみよがしに見せつけてくるな」
横山「アメリカ海軍がこれほどとは」
岡崎「戦いは兵器だけで行うものではありません。交渉も戦です。気合を入れましょう」
ハッとして頷く河辺、横山。

○伊江島・食堂（夕）

机に並ぶコーンや牛肉。席に座る木村、内田、本庄。
内田「（小声）アメリカは普段からこんな豪華な物を・・・・・・」
本庄「肉が大きい。まるで国力そのもの」
お腹がぎゅるぎゅる鳴る3人。内田、本庄はガッついて食べ始める。
木村「お前ら」
注意する木村。ハッとする内田。
木村「武士は食わねど・・・・・・だぞ」
内田、本庄は赤面する。
木村にアメリカ兵達が話しかける。マサユキ・パットンが間に入る。
マサユキ・パットン「彼らは日本で捕虜となった兄弟達の安否を知りたい、と言っています」
懇願するアメリカ兵士1。
木村「伝えてくれ。今は答えることはできない。しかし名前と詳細を教えてくれれば、確認次第、返答できる。と」
マサユキ・パットンは英語で会話。アメリカ兵は大喜びで木村に握手する。
アメリカ兵「サンクス！　サンクス！」
去っていくアメリカ兵の目に涙。

呆然とする木村。
内田「どうしました？」
木村「いや。アメリカ兵は鬼畜と聞いていたから」
内田「肉親への想いは我々と同じでしたね」
不思議そうに眺める２人。
本庄「人間なんて変わりませんよ。戦争があれこれ決めつけるだけです」
皮肉そうに話す本庄。

○緑十字機前（夕）

アメリカ整備士が整備をしている。
アメリカ整備士「（英語）もう大丈夫。フラップは直りました」
鷲野「（英語）日本機とアメリカ機で部品は違いますが大丈夫ですか？」
アメリカ整備士「（英語）同じ飛行機です。大丈夫」
鷲野はお辞儀をする。マサユキ・パットンが近づいてくる。
マサユキ・パットン「ほかに何かあれば遠慮なく言ってください」
鷲野はボーっとしてしまう。
マサユキ・パットン「どうしました？」
鷲野「い、いえ。皆さんが親切なので、つい先週まで戦争をしていたことを忘れてしまって」
にこやかな顔のマサユキ・パットン。
マサユキ・パットン「少しお話いいですか」
マサユキ・パットンと話す鷲野。

○杉浦の操縦するゼロ戦（夜）

コクピットの杉浦。通信機から声。
厚木パイロット１「おい。杉浦。次は逃げるなよ」
杉浦「誰も逃げてなどいない！」
厚木パイロット「おい。見ろ！」
前方には１機のアメリカ偵察機。
厚木パイロット２「アメリカ機だな」
杉浦「吉田。新坂。見ていてくれ」

○緑十字機前（夜）
話をする鷲野とマサユキ・パットン。
マサユキ・パットン「私のお爺ちゃんの故郷は福島でした。一度行ってみたくて」
鷲野「福島のどこだったのですか？」
マサユキ・パットン「会津です」
鷲野「会津ですか。パットンさんは、サムライの末裔ですね」
マサユキ・パットン「お爺ちゃん、いつも言ってました。卑怯なふるまい。弱いものいじめは絶対ダメと。会津の教えです」
懐かしそうに語るマサユキ・パットン。
鷲野「素敵なご家族だったのですね」
笑顔の鷲野。
マサユキ・パットン「鷲野さんのご家族は？」
鷲野「・・・・・・。数か月前、アメリカ軍の空襲で」
鷲野は言った後にハッとするがそれ以上に、マサユキ・パットンが狼狽。
マサユキ・パットン「す、すみません。とんでもないことを」
鷲野「い、いや・・・・・・」
場の雰囲気が固まる。
マサユキ・パットン「ど、どうでしょう。皆さんで映画でも観ては？」
不思議な顔の鷲野。

○マニラ・連合軍司令部・入口（夜）
厳戒態勢の司令部。ずらっと並ぶ銃を装備し並ぶアメリカ兵達。その中を堂々と歩く河辺、横山、岡崎一行。
岡崎「（小声）あの時と同じですね」
横山「（小声）あの時？」
岡崎「（小声）江戸城無欠開城です。我らが勝海舟で」
横山「（小声）マッカーサーは西郷隆盛ですか」
河辺「（小声）残念ながらマッカーサーは日

本人ではない」
横山「しかし同じ人間。信じるしか、我らに道はありません」
アメリカのカメラマンたちが川辺達の写真を撮りまくる。

○同・会議室・前（夜）
河辺、横山、岡崎の前に立つウィロビー少将（４８）。軍刀を置く河辺と横山。鋭い目つきの河辺。
河辺「（小声）アメリカの要求次第ではこの軍刀で」
緊張する岡崎。
横山「賽は投げられた。行きましょう」
ウィロビーはノックをする。

○同・会議場（夜）
広々とした会議場。真正面にどんと座るマッカーサー。威圧感がある。河辺も姿勢を正し堂々と席に着く。続く、横山、岡崎。机の上の文書を読み始める岡崎。

○厚木戦闘隊（夜）
空を飛ぶ厚木戦闘隊。

○東京上空（夜）
アメリカ偵察機が厚木ゼロ戦部隊に撃墜される。炎と煙の中墜落していくアメリカ偵察機。
杉浦「吉田。新坂。仇はとったぞ！」
厚木パイロット１「これでアメリカも激怒する。戦争再開だ！」
厚木パイロット２「一億総決起。勝つまでやるぞ」

○伊江島・仮設映画室（夜）
暗い室内。マサユキ・パットンと鷲野、木村、内田、本庄はアメリカのカラーアニメ映画を観る。

マサユキ・パットン「すみません。今は子ども用のアニメーションしかないので」
アメリカのアニメーションを観て驚く鷲野と木村、内田、本庄。

○マニラ・連合軍司令部・会議室（夜）
席にいるマッカーサー、ウィロビー少将、河辺、横山、岡崎。文書を読み終えホッとする岡崎。
岡崎「（小声）安心してください。陛下のことはこの文書には書かれてありません」
大きく深呼吸する河辺。
河辺「（小声）命が繋がった。ルビコン川は無事に渡れたな」
姿勢を正し堂々と話し始める河辺。
河辺「（英語）マッカーサー将軍。アメリカ側の要望はわかりました。しかしここには８月２３日に厚木基地に進駐すると書かれているが時間がなさすぎる」
マッカーサー「（英語）これを交渉だと思ったら大間違いだ。これは命令である」
小声で横山は河辺に話す。
横山「（小声）厚木の状態があちらに知れたら・・・・・・」
横山を抑える河辺。話を始める河辺。

○伊江島・搭乗員・寝室（夜）
ベットで横になる鷲野、木村、内田、本庄。
木村「何もかも驚くばかりでした」
本庄「食べ物の量に、色のついたアニメーション。日本とは桁違いです。こんな国と戦争していたとは」
木村「悔しいが完敗だ」
唖然とする内田達。
内田「今の日本じゃアニメどころかまともな食事も・・・・・・」
落ち込む木村、内田、本庄。
鷲野「おいおい。今の日本では。だろ？」
本庄「？」

鷲野「今は無理でもいつか。いつかきっとアメリカを超えるアニメーションや食事を作る。そんな日本を再建させればいい」
鷲野の話に聞き入る３人。

○マニラ・連合軍司令部・会議室（夜）
交渉している日本側とアメリカ側。突如入ってくるアメリカ兵士。
アメリカ兵士「（英語）大変です！」
マッカーサー「（英語）馬鹿者！　公式会談だぞ」
アメリカ兵士「（英語）東京上空でわが軍の偵察機が撃墜されました」
ウィロビー少将「（英語）なんだと！」
マッカーサーは険しい顔。横山、岡崎は顔面蒼白。
アメリカ兵士「（英語）犯人は日本の航空隊。これは宣戦布告なのでは！」
マッカーサーは鋭い目つきで軍使３人をにらむ。
岡崎「終わった」
横山「もうだめだ。戦争再開か・・・・・」
問い詰めるマッカーサー。
マッカーサー「（英語）君たちは降伏軍使。なのに、日本は攻撃をしてきた。これはどういうことだ？」
言葉に詰まる横山と岡崎。

○皇居・入口（夜）
公用車が止まる。歩く東久邇宮と重光。

○同・庭（夜）
東久邇宮と重光の前に来られる高松宮（４０）。お互い深くお辞儀。
高松宮「お久しぶりです」
重光「陛下の弟君である殿下にお願いがありまして・・・・・」
高松宮「３０２空。厚木航空隊のことですね？」

重光は頷く。
高松宮「私も海軍軍人です。陛下のお考えを彼らに伝えたいと思います」
深々とお辞儀をする重光。

○マニラ・連合軍司令部・会議室（夜）

問い詰めるマッカーサー。
マッカーサー「（英語）どうなんだ！　まだ戦争をするつもりなのか？」
下を向く横山、岡崎。だが河辺が堂々と口を開く。
河辺「（英語）マッカーサー将軍。私はあなたに感謝したい」
怪訝な顔のマッカーサー。
河辺「（英語）アメリカの新聞各社が陛下を侮辱する中、先ほどの文書には一切それが見られなかった。これはあなた方の誠意とみられる。我々の誇りは守られた」
河辺は堂々と続ける。
河辺「（英語）正直に話しましょう。今、厚木では反乱を起こした者がいます。アメリカ機撃墜は彼らによる攻撃でしょう」
驚く横山は河辺を止めようとするが河辺は横山に話す。
河辺「アメリカが誠意を見せたなら、我らも誠意で答えねば」
マッカーサーは静かに見守っている。
河辺「（英語）日本はポツダム宣言を受諾しました。そのため誠意をもって条件を遂行したい。だがあなた方次第で、国内で大反乱が起きかねないことも事実」
マッカーサーは静かに聞いている。
河辺「（英語）英国民が女王陛下を慕う以上に、日本人は天皇陛下を敬っております。そのことをお忘れなく」
マッカーサー「（英語）結論として、日本は降伏するつもりがあるのだね？」
うなずく河辺。お互いに見るマッカーサーと河辺。

河辺「（英語）帰国次第、あなた方が進駐できるよう全力で準備しましょう」
マッカーサー「（英語）・・・・・・。わかった」
河辺「（英語）ありがとう」
堂々と話す河辺。頷くマッカーサー。
ホッとする横山、岡崎。

○同・廊下（夜）
歩く河辺と横山と岡崎。
河辺「結局、手の内を見せてしまったな」
岡崎「いえ。あれでよかったと思います。下手な小細工より誠意が伝わることが大切です」

○同・会議室（夜）
座るマッカーサーとウィロビー。
マッカーサー「（英語）敗軍の将なのに誇りを失わず堂々としていた」
ウィロビー「（英語）ええ。立派でした」
マッカーサー「あの目を見たら信じるほかあるまい」
フッと笑うマッカーサー。
マッカーサー「（英語）ただ気になることを言っていたな。我々次第で大反乱が起こるかもしれない、と」
ウィロビー「（英語）天皇をどうするかで、わが軍の進駐も大いに変わる、ということでしょう」
マッカーサーは腕を組んで考える。

○伊江島・緑十字機前（夜）
鷲野が機体を確認している。
鷲野「よし。いつでも出発できる」

○伊江島・広場（夜）
宿舎に戻ろうとする鷲野。
バカ騒ぎをするアメリカ海兵1、2。
鷲野「祝賀気分か」
泥酔して鷲野に話すアメリカ海兵1。

アメリカ海兵1「(英語) よう日本人。今回の戦争。残念だったな」
下卑た笑いのアメリカ海兵1。
アメリカ海兵1「(英語) こっちはまだまだ続けても良いんだぜ」
アメリカ海兵2「(英語) おい。やめろ」
アメリカ海兵1「(英語) 大丈夫、大丈夫。どうせ英語はわからねえよ」
抑える海兵2だが止まらない海兵1。
鷲野は無視して去ろうとする。
去り際に海兵1が叫ぶ。
アメリカ海兵1「(英語) 地上で逃げ回る日本人を戦闘機で撃つのは最高だったぜ」
大笑いのアメリカ海兵1。鷲野の胸ポケットから家族写真が見える。その言葉で我を失う鷲野。鷲野は軍刀に手をかけアメリカ海兵1に近づく。目は我を忘れている。アメリカ海兵1・2は鷲野が近づくのに気付かない。鷲野は軍刀でアメリカ海兵1を斬ろうとする。
スティーブ「(英語) クソ野郎!」
突如、現れたスティーブは海兵1をぶん殴る。アメリカ海兵1は驚く。
スティーブ「(英語) 空の男の面汚しめ。俺が相手だ!」
ファイティングポーズを構えるスティーブ。逃げていくアメリカ海兵1と海兵2。唖然とする鷲野。

○伊江島・海岸 (夜)

月が光る晩。海岸には波の音。
鷲野「(英語) なぜヤツを殴った?」
スティーブ「(英語) 別にお前のためじゃない。ああいうやつが大嫌いなだけだ」
目をそらすスティーブ。沈黙。
スティーブ「(英語) マサユキ・パットンから聞いたよ。家族が死んだんだってな。空襲で」
鷲野「・・・・・・」

スティーブ「（英語）謝る気はない。戦争だからな」
鷲野は険しい顔。
月を見るスティーブ。
スティーブ「（英語）月を見ると思い出す。兄貴を」
鷲野「（英語）兄貴？」
スティーブ「（英語）こんな月の晩だった。海軍に入るからと地区大会の記念ボールをくれたのは」
腰に下げたバックからボールを取り出すスティーブは鷲野に軽く投げる。キャッチする鷲野。
スティーブ「（英語）剛速球のピッチャーでな。自慢の兄貴だった。ガキの頃は泣き虫の俺をいつもかばってくれた」
鷲野「（英語）その兄さんは？」
スティーブ「（英語）死んだよ。真珠湾で」
目をそらす鷲野。
スティーブ「（英語）戦争だから仕方ない。そんな言葉で終わらせられない。だが、戦争は終わった。そして俺らは生き残った。あとは一緒に新しい時代を築いていくしかない」
鷲野「・・・・・・」
スティーブ「（英語）邪魔したな」
去っていくスティーブ。
鷲野「（英語）待ってくれ」
ボールを投げ返す鷲野。受け取るスティーブ。
鷲野「（英語）新しい時代。いい言葉だ」
再度去りながら後ろ向きで手を振るスティーブ。入れ替わりに来る木村。
木村「大尉！　軍使の方々が戻られました。ただちに出発とのことです」

○伊江島・飛行場（夜）

緑十字機の前で見送るスティーブとマサユキ・パットン。整列する鷲野、木村、本庄、内田、他搭乗員達。

スティーブ「（英語）燃料は満タンにした。
早く帰って戦争を終わらせてくれ」
頷く鷲野。
鷲野「（英語）また会おう」
大量の袋を鷲野に渡すマサユキ・パットン。
マサユキ・パットン「アメリカのお菓子です。皆さん物資がなくて大変でしょう。
食べてください」
内田「ありがとう」
エンジンがかかり始める。
鷲野「さあ。東京に帰るぞ」
皆、緑十字機に乗る。

○夜空（夜）

月夜の下、緑十字機が空を飛ぶ。

○緑十字機内（夜）

深刻な顔の河辺、横山、岡崎。
河辺「結局、国体の護持については確約が取れなかった」
岡崎「あの場では仕方ありません」
横山「でも厚木進駐を８月２３日から２６日まで伸ばせました」
河辺「それまでに何とか厚木の反乱を収束させねば」
岡崎「アメリカから信頼を勝ち取る。陛下の御身を守るのはそれしかないでしょう」

○首相官邸（夜）

会話する東久邇宮と重光。
重光「緑十字機が無事に軍使を乗せて出発したようです」
東久邇宮「では交渉は？」
重光「陛下を侮辱するような文言が無かったのが不幸中の幸い。しかしこちらの要求はほとんど・・・・・・」
首をふる重光。
重光「厚木の反乱をどうするか。８月２６日にアメリカ軍が来るとのことですが」

東久邇宮「殿下を信じましょう」

○厚木飛行場・指令室

小園指令は落ち着かない。

小園「なぜだ。なぜ思ったほど兵が集まらない」

厚木の隊員が入ってくる。

厚木隊員「司令。各地の部隊が説得により戦争継続の意思が揺らいでるとのこと！」

小園「何だと！」

厚木隊員「情報によりますと、ここ厚木にも高松宮殿下が向かわれたと」

小園「そんなことをされれば士気が」

厚木隊員「ど、どうしましょう？」

○緑十字機内（夜）

座りながら寝る横山、河辺、岡崎。突如ブザーが鳴る。全員飛び起きる。

○緑十字機内・コクピット（夜）

操縦席で操縦する鷲野と木村。内田が慌てて入ってくる。

鷲野「内田！どうした！」

内田「た、大変です。燃料切れです！」

鷲野「そんなバカな！　アメリカが満杯にしてくれたはずだぞ」

内田「し、しかし、ないものはなく・・・・」

ハッとする内田。

内田「もしかしたら！」

内田「アメリカはガロン。日本はリットル。間違えてしまったのかも」

鷲野「そんなバカなことが・・・・」

驚愕の鷲野。

内田「もうダメです。ここから着陸できる飛行場はありません」

本庄「では待ってるのは」

鷲野「燃料切れによる墜落・・・・」

肩を落とす木村。

木村「ここまできて死ぬなんて・・・・」

内田「戦争は再開・・・・・・・か」

本庄「美知子・・・」
沈黙してしまうコクピット。
鷲野「いや。させない」
鷲野はマイクをとる。

○緑十字機内・軍使席（夜）
驚いている河辺、横山、岡崎。
流れてくるアナウンス。
鷲野の声「この飛行機は不時着します。救命胴衣をつけ姿勢を低くして前の座席を掴んでください」
河辺「ふ、不時着だと！」
岡崎「ここまできて」
横山「うわあああああああ」
上下に激しく揺れる機内。

○同・コクピット（夜）
運転する鷲野。
鷲野「皆、準備しろ」
木村「ま、まさかこんな夜に不時着だなんて。無謀すぎます」
鷲野「だったらどうする。何もせず燃料切れで墜落死か？」
本庄「じ、自分は大尉を信じます」
鷲野「ラバウルで撃墜された夜もこんな夜だった。大丈夫だ！」
内田「しかしどうやって？」
鷲野「砂浜と海岸の間を狙う。俺を信じろ」
ガタガタに揺れまくる機内。

○夜の海岸線（夜）
緑十字機が轟音と共に着陸しようとする。

○首相官邸（夜）
慌てて報告する重光。
重光「た、大変です！緑十字機が消息を絶ちました！」
東久邇宮「何ですと！」
重光「伊江島を出発した後、順調に飛行して

いたようなのですが、急に連絡が途絶え・・・・・・」
東久邇宮「戦争再開・・・・・・」

○緑十字機内（夜）

皆、倒れている。フラフラ立上がる。
鷲野「御怪我はありませんか！」
横山「皆、無事か？」
周りの様子をみる内田。
内田「大丈夫です。けが人はありません」
河辺「またしても奇跡」
波の音が聞こえる。
河辺「しまった！　海の上か！」
横山「こ、このままでは全員海の底に沈みます。文書はどうすれば？」
河辺は大事そうにバックを取り出す。
河辺「この中で一番泳ぎが達者なヤツは？」
岡崎が手を上げる。
岡崎「オリンピックに出た経験。私なら岸まで行けます」
河辺「一人が生き延びればよい。頼んだぞ」
河辺が岡崎に握手する。
河辺「軍人でもないのに命がけの任務。ありがとう」
岡崎「同じ日本人です。何をいいますか。死んでも届けます」
涙目の二人は固く抱擁する。
河辺「死ぬのは許さん。だが頼んだぞ！」
岡崎が決死の覚悟で海に飛び込む。しかし海はひざ下まで。あっけにとられる全員。
木村「あ。ここ。海岸線だ」
そのあとに皆が爆笑。

○海岸（夜）

海と砂浜の間に無事に不時着した緑十字機。月夜に照らされている。

○緑十字機内（夜）

皆笑っている。河辺は赤面し怒鳴る。

河辺「お前たち！　笑いすぎだ！」
間に入る横山。
横山「その通り。我々には笑ってる時間も惜しい。急ごう」
続々と緑十字機から海へ降りていく

○緑十字機前（夜）

月夜に照らされた海岸に不時着した緑十字機。皆、浜へ上がる。鷲野は月夜に照らされた、機体に刻まれた新坂、吉田、本庄、内田、杉浦、木村、鷲野の名前に触れる。
鷲野「ありがとう」
鷲野は緑十字機から去っていく。夜の波にさらされる緑十字機。

○海岸（夜）

月が雲に隠されていく。
木村「月が消えた。あと１０分遅ければ」
本庄「不時着は失敗でした。まさに天祐」
真っ暗な夜の海岸を歩く鷲野達。
横山「それにしてもここはどこだ」
鷲野「平塚あたりでは？」
横山「いや、平塚は防御陣地が築かれている。ここは違う」
本庄「今の不時着の音。周りにも聞こえましたよね」
木村「ああ。厚木の部隊が襲ってくるかも」
鷲野「近くに軍の施設があれば良いのだが」
大声で叫ぶ河辺。
河辺「俺は陸軍の河辺だ！　誰かおらんか！」
返事はない。波の音だけが聞こえる。

○本庄宅（夜）

お守りを大事に握る美知子。

○海岸（夜）

真っ暗の中、右往左往する鷲野達。
横山「ここがどこか分からんと助けも呼べん」
暗闇の方から音がする。

河辺「誰だ！　出てこい！」
シーンと静まり返った林。
内田が前に出る。
内田「大丈夫です。安心して」
カサコソ音がする。その後に出てくるのは、安居右門（７５）と安居正雄（１７）。
安居「ア、アンタら日本人か？」
内田「ええ」
正雄「ホントにホントか？」
内田「疑い深いなぁ。この歌はどうです？」
内田「うさぎおいし、かのやま～」
童謡「故郷」を歌う内田。
ホッとする安居と正雄。
正雄「不時着したＢ２９の米兵が日本人にばけてると思って」
砂浜に座る安居。慌てて話す河辺。
河辺「それよりここはどこだ」
安居「天竜川の河口左岸ですけんど」
河辺「浜松の近くか・・・・・・」
安居「どうしました？」
河辺「急いで人を呼んで欲しい。日本がどうなるかの瀬戸際なのだ！」
大慌てで走る正雄。

○鮫島集落（夜）
半鐘を鳴らす安居。
安居「みんな起きろ！　大変だ！」

○鮫島集落・全景（夜）
真っ暗な集落に光が灯り始める。

○鮫島集落・民家前（夜）
走る村民１と村民２。
村民１「一体、どうした？」
村民２「偉い人の飛行機が不時着したとか」
皆、集会所を目指す。

○同・集会所（夜）
軍使達は急ぎ集会所へ入る。

河辺「お茶。あるかね？」
安居恵（１７）が人数分のお茶をもってくる。
恵「ど、どうぞ」
軍使達は一気にお茶を飲み干す。
横山「ありがとう」
軍使達は一気に集会所を出て行く。集落全体が慌ただしい。唖然とする恵。
戻ってくる木村。
木村「もう一杯。もらえる？」
恵「は、はい」
急いでお茶を入れる恵。

○同・電話前（夜）

電話交換の女性の前で鷲野がせがむ。
鷲野「頼む！東京への接続を急いでくれ！」
電話交換女性「すみません。何度やっても東京には・・・・・」
機械をいじる電話交換女性。慌てている。大慌ての鷲野。
鷲野「ここは鮫島・・・・・。すると袖浦だ。袖浦飛行場につないで欲しい」
電話交換女性「それなら」
電話を操作する交換女性。
× × ×
電話で話す鷲野。
鷲野「私は鷲野大尉。マッカーサーの元より降伏文書を持って帰還した者。だが機は故障で不時着。急ぎ飛行機を出して欲しい」
電話の相手「申し訳ありません。我が飛行場に飛行機は一機もなく」
鷲野「バカな！　飛行場だろ？」
電話の相手「本土決戦に備え浜松飛行場へ送ったばかりでして」
鷲野「今日中に帰らなければ、東京が大変なことになりますぞ！」
電話の相手「し、しかし」
声を荒げる鷲野。
鷲野「しかしもへちまもあるか！　あんたらしか頼れる相手はいないんだ！　頼む！」

電話の相手「・・・・・・。どうでしょう？
今から自動車を向けます。それで浜松へ向かっては？」
鷲野「分かった」

○同・バス停（夜）
鮫島集落の人々が集まりランプで辺りを照らす。落ち着かない鷲野達。
安居「来ましたぞ！」
向こうから数台の自動車がやってくる。
横山「これで浜松へ行ける」
鷲野達と軍使達が整列する。キョトンとする鮫島住民達。
河辺「あなた方のおかげで日本は救われる。ありがとう」
全員が一斉にびしっと敬礼。驚く住民達。
内田「皆さんで食べてください」
内田は伊江島でアメリカ兵からもらった大量のお菓子を住民達に配る。
横山「よし。出発だ！」
去っていく自動車。残された鮫島住民。
安居「軍人さんが俺らに敬礼するなんて」
驚いている鮫島住民たち。

○浜松市街・全景
朝日が昇り始める。
瓦礫の街の浜松。移動する自動車。

○自動車内
鷲野が外を見る。
鷲野「浜松も焼け野原だな」
本庄「戦争再開ととなれば無事だった都市も廃墟となります」
木村「急ぎましょう」

○浜松飛行場
自動車を降りる鷲野達。浜松隊員が近づいてくる。
浜松隊員「お話は聞いております。重爆撃機、『飛龍』を修理しておきました」

○同・滑走路
飛び立つ飛龍。
○飛龍・座席
席に座る鷲野達。ホッとする岡崎。
岡崎「ここまで来れば東京も目と鼻の先」
横山「油断は出来ん。厚木がもし襲ってきたら今度こそ・・・・・・」
内田「た、大変です！」
窓の外を見る内田。
○空
飛龍に近づいてくる一機のゼロ戦。
○飛龍・座席
驚く鷲野。
内田「厚木の戦闘機です」
鷲野「おかしい！　なぜ気づかれた！」
河辺「万事休すか・・・・・・」
窓の外のゼロ戦の動きを凝視。
鷲野「あの飛び方。俺に似ている。まさか・・・・・・。（小声）一か八かだ」
鷲野は飛龍内の通信機を取る。
鷲野「杉浦聞こえるか！　俺だ。鷲野だ」
窓の外のゼロ戦は追跡してくる。
鷲野「（大きな声）残念だったな、杉浦！　この飛行機は囮機。降伏文書を持った軍使は車で東京に向かったぞ」
鷲野「今更この機を撃墜しても無駄だ。日本の降伏は揺るがないぞ」
窓の外のゼロ戦は飛龍から離れていく。
木村が鷲野に話しかける。
木村「あれは杉浦だったのでしょうか？」
鷲野「おそらくな。素直すぎるのが奴のいい所でもあり悪い所でもあるのだが」
本庄「杉浦さんの素直さに救われました」
内田「杉浦さん・・・・・・」
○厚木飛行場・指令室
小園は落ち着かない。

小園「なぜだ！　なぜ全国の部隊は我らに続かない！」
窓から見えるのは整列する２０００近くの隊員達。窓を開け怒鳴る小園。
小園「お前達何をしている！　勝手な行動は許さんぞ！」
整列する隊員たちの一人が前に出る。
厚木隊員「陛下の弟君である高松宮殿下からすべての戦闘を止めよとのお言葉を頂戴しました。殿下のお言葉は陛下のお言葉。我々は帰らせていただきます」
全員敬礼後、回れ右をし去っていく。
部屋に戻る小園。
小園「何を言う！　皆、徹底抗戦に賛成してただろう！」
ジリリンと鳴る電話。電話を取る小園。
小園「こちら厚木航空隊司令。何！　戦闘を止めるだと？　待て！　諦めるな」
ツーツーと鳴る音。
小園「クソッ」
走り外に出ようとするが入口には河辺と横山。笑顔になる司令。
司令「河辺中将！　それに横山少将も！　決起に賛同してくれたのですか？」
首をふる横山。
横山「正式な降伏文書をマニラより持ち帰った。戦争は終わった」
慌てふためく小園。
小園「か河辺中将。陸軍が我らに続けば！　本土決戦を叫ばれてたあなたなら」
首をふる河辺。
河辺「終戦が陛下のお言葉ならそれに従うのが陸軍軍人である」
横山「小園司令。海軍軍人の君ならわかるだろう。マニラで見てきたアメリカ艦隊は想像を超えていた。これ以上戦争を続けても・・・・・・」
ワナワナふるえる司令。
小園「あきらめん。あきらめんぞ」
外に大急ぎで出て行く小園。

だが、廊下で待つのは若手隊員達。
小園「お、お前達！　中にいる二人を拘束しろ。これは命令・・・・・・」
突如声をあげる隊員の一人。
隊員「誰か！　軍医を！　小園司令がマラリアを再発されたぞ」
小園「マ、マラリアだと？　あれはとっくに治って」
隊員「司令はマラリアの高熱で正常な判断が出来なくなっている！　直ちに病院へお連れしろ！」
皆が小園を取り押さえる。
小園「は、はかったな」
廊下に出てくる横山、河辺。
横山「君はマラリアだ。ゆっくり休んで正気に戻るんだ」
ポロポロ泣き出す司令。
小園「終わりだ。もう日本は終わった。永久にアメリカの属国だ」
下を向く横山と河辺。連れていかれる小園。

○同・飛行場・滑走路
着陸するゼロ戦。

○ゼロ戦の前
降りてくる杉浦。
杉浦「あきらめん。あきらめるもんか！」
陰から現れる鷲野。
鷲野「杉浦。お前は精一杯やった。もういい」
驚く杉浦
杉浦「鷲野大尉！」
一瞬顔が喜ぶ杉浦。しかし怒って己を奮い立たせる
杉浦「鷲野！」
鷲野「もうやめよう。はっきり言う。日本は戦争に負けた」
杉浦「違う！負けてない。勝つのを諦めただけ。諦めなければ・・・・・・」
鷲野「アメリカとの国力差は絶望的。これ以

上続けても犠牲が増えるだけだぞ」
杉浦「犠牲がなんだっていうのです！」
地団駄を踏む杉浦。
杉浦「新坂、吉田。特攻で死んだあいつらはどうなるんです！　無駄死にですか？」
鷲野「・・・・・・・」
目を瞑る鷲野。
杉浦「憎くないのですか？　アメリカが！あなたのご家族だって奴等に」
息が詰まる杉浦。
杉浦「ここで諦めてしまったら。ここで諦めてしまったら。あいつらの死は。あいつらの死は」
膝を崩し号泣する杉浦。
杉浦「俺の。俺の妹の佳代子も広島で・・・」
地面を叩く杉浦。黙って見ている鷲野。
泣きながら語る杉浦。
鷲野「すべては終わった。生き残ったものは新たな時代のために歩かねばならない」
語り掛ける鷲野。
杉浦「い、いやだ。みんないた。皆が輝いていたあの時こそ、俺のすべてだった。もう二度と帰って来ないあの時こそ」
杉浦はピストルを取り出す。
杉浦「サヨナラ。鷲野大尉」
鷲野「杉浦！」
鷲野は大声で止める。バンと大きな銃声が一発。

○鮫島海岸

波が打ち寄せる海岸。
N・あの日、不時着した緑十字機はその後、台風によって破損し、少しずつ波にのまれていったという。令和の今、海岸にその姿はない。

○本庄宅

玄関前にいる本庄。
本庄「帰ったぞ」
美知子は怒って本庄にビンタをしよう

とする。が本庄の顔を見て涙ぐむ。抱きしめあう二人。
美知子「おかえりなさい」

○横須賀海軍基地・広場

呆然と立っている内田。近づく鷲野。
鷲野「すべては終わったな」
内田「ええ」
鷲野「木村は故郷に戻り、本庄も奥さんのもとに帰っていった」
内田「そうですか・・・・・・」
鷲野「おい、内田」
内田は鷲野を見る。
鷲野「なぜあんなことをした？」
内田「あんなこと？」
鷲野「緑十字機のフラップの故障。帰りの燃料の廃棄。あれは全部お前の仕業だったんだろう？」
ビクッとする内田。険しい顔で責める鷲野。
内田「な、何を言って・・・・・・」
鷲野「隠しても無駄だ。帰りの飛行で杉浦に居場所を教えたのもお前だったのだろう。俺もまんまと騙されたがな」
内田は冷静になる。
鷲野「なぜだ？　お前のせいで戦争が再開するかもしれなかったのだぞ！」
内田は開き直り語り始める。
内田「杉浦さんと同じですよ」
鷲野「杉浦と？」
内田「大尉。私は北海道の貧しい村の出身でしてね。幼いころに父母が死亡。親戚中をたらい回しにされ、牛や馬みたいに働かされてました。酷いものでした。一日一食ありゃ良い方で2，3日飯がない日だってありました」
内田は笑う。
内田「そんな中です。海軍だけは三食食わせてくれて自分を認めてくれたのです。訓

練は厳しかったですが、あの鬼みたいな
親戚どもに比べれば天国でしたよ」
内田は遠い目をする。
内田「自分にとって軍は家族でした。家族が
無くなるくらいならいっそ」
鷲野は厳しい目。
内田「大尉。どうしますか？　自分を軍法会
議にかけますか。あっ。といっても軍は
なくなるんでしたね」
鷲野は首を振る。
鷲野「もういい。すべては終わった」
鷲野は内田の肩を持つ。
鷲野「お前も俺も新しい時代を生きるんだ」
去っていく鷲野は振り返る。
鷲野「いいか。内田。絶対死ぬなよ」
再び去る鷲野に、涙を流す内田。

○厚木飛行場
T・8月30日。
厚木に降り立つアメリカ輸送機。

○同・滑走路
飛行機から降りるサングラスをかけた
マッカーサーと部下1と部下2。
静まり返った飛行場を見て驚く。
部下1「（英語）日本の徹底抗戦を覚悟して
ましたがこれほど上手くいくとは」
部下2「（英語）これも天皇の終戦命令によ
るものでしょう」
マッカーサー「（英語）奇跡だ」
パイプを吸うマッカーサー。
N・その後、マッカーサーはアメリカ
本国へ「天皇制を破壊すれば日本は崩
壊し、混乱を抑えるには最低100万
人のアメリカ兵と予測できない被害と
長期間の駐留が必要となるだろう」と
報告。逆にその権威を利用して統治政
策を進めることとなった。

○国後島・民家

T・9月1日
銃を持ったソ連軍が日本人を追い出す。

○連合国司令部
腕を組むマッカーサー。報告する部下。
部下「（英語）ソ連が日本への侵攻を止めません。国後島、色丹島を占領しました」
マッカーサー「（英語）日本は我らの保護下。これ以上スターリンの好きにはさせるな」

○平原
ソ連軍と対峙する木の影にいる日本兵。ソ連軍戦車が向こうから来る。
これで最後かと手榴弾を握り突撃を試みるが、突如、ソ連軍は引き返していく。驚きで呆然とする日本兵。

○戦艦ミズーリ号
T・9月2日。
アメリカ水兵に囲まれる中、重光が調印する。近くには、横山と岡崎の姿。
N・この日をもって太平洋戦争は正式に終結した。日本は3発目の原子爆弾を投下されず、ソ連に北海道を占領されず分断国家とならずに済んだ。

○寺（夕方）
秋空の下、和尚が焚火をしている。
墓の前でじっと手を合わせ拝む私服の鷲野。墓には佳代子と林平の名前。鷲野は家族写真を見て胸ポケットにしまい立ち上がる。和尚が鷲野に近づく。
ひぐらしが鳴き始める。
和尚「夏も終わりましたな」
鷲野「ええ。いやというほど長い。そして暑い夏でした」
和尚「家も街も。何もかも焼けてしまいまし

た。みんな、はたして冬を越せられるのか」
おびえている和尚。
鷲野「大丈夫ですよ」
立ち上がる鷲野。
鷲野「冬の後には春がきます。必ずね」
焚火をみてハッとする鷲野。鷲野は胸から遺書を出す。
鷲野「和尚。これも一緒にいいですかな？」
和尚「手紙？　良いのですか燃やして・・・」
見えないように焚火に遺書を入れてしまう鷲野。燃えて灰になる遺書。
鷲野「いいのです。もう二度と書くことはありませんから」
秋空を見上げる鷲野。
鷲野「それでは」
軽く会釈しゆっくりと去っていく。

○日本列島全景

Ｎ・鷲野達が命を賭して降伏文書を日本へ持ち帰り７８年が過ぎた現在、伊江島をはじめとした沖縄や日本各地には、１３０個の米軍基地が残されている。また国後島、色丹島をはじめとした北方領土はソ連の後継国家であるロシアが占拠しており、日本政府はこれを認めておらず抗議を続けている。

（おわり）